

■発行：一般財団法人熊本市国際交流振興事業団  
 〒860-0806 熊本市中央区花畑町4-18 熊本市国際交流会館  
 ■Publisher: Kumamoto International Foundation  
 4-18 Hanabata-Cho, Chuou-Ku, Kumamoto-Shi, 860-0806  
 TEL:096-359-2121/ FAX:096-359-5783  
 e-mail: pj-info@kumamoto-if.or.jp URL:https://www.kumamoto-if.or.jp/



## 誰ひとり取り残さない社会・外国人住民と考える防災

熊本市国際交流振興事業団では、熊本地震が発生した4月に、毎年、震災を振り返り記憶に留めるためにセミナーを開催してきました。昨年は新型コロナウイルス感染症の影響でセミナー形式ではなくニュースレターとホームページ上に、外国人住民の被災体験とその被災体験が現在の生活にどう影響しているかを掲載しました。熊本地震から5年目の節目となった今年は、熊本地震時に支援する側として活動した経験を持つ外国人住民の方々にスポットを当て、「誰ひとり取り残さない社会・外国人住民と考える防災」をテーマにシンポジウムを開催しました。

熊本市の地域防災計画の中では外国人住民は「災害時要配慮者」として指定されています。しかし、熊本地震の際には支援する側となり、地域への支援活動を行った外国人住民の方々がいらっしゃいました。今回は支援する側として活動した外国人住民の方々の体験談を聞き、外国人・日本人住民が安心してともに支え合うことができる災害に強いまちづくりについて考えるシンポジウムを、今年4月17日に熊本市国際交流会館2階交流ラウンジで開催しました。

当時、熊本在住2年目の留学生だったイギリス出身のアンドリュー・ミッチェルさん、日本人の配偶者として熊本在住25年となる熊本フィリピン人会（FOK）代表でフィリピン出身の松田アデラさん、同じく日本人配偶者として熊本在住15年だった熊本イスラミックセンター代表のインドネシア出身マーロ・スイスワヒューさんの3人をパネリストに迎え、地震の体験談、支援活動の話、そして災害に強いまちづくりについての意見をお伺いしました。

### それぞれの被災体験

2016年4月14日に起きた熊本地震（前震）では、3人がそれぞれ自宅や子供の習い事の送迎中の車内で被災されました。発災直後は何が起きたか分からないまま、家族や近所の人に誘われて、安全な場所へ避難したり、不安なまま家族と過ごしたりしたそうです。

通常であれば、これから復旧・復興への動きとなるのですが、熊本地震ではその後4月16日（本震）にさらに大きな揺れに襲われました。パネリストの3人は、避難所で、あるいは一時的に他県へ移動し、それぞれに避難生活を送られたそうです。

熊本地震は本当に大きな地震で、地震が多い日本で長年暮らす私たちにとってもそうですが、このような地震は初めてでした。普段、地震が起らないイギリス出身のアンドリューさんはもちろん、地震経験をお持ちのインドネシア出身のマーロさん、フィリピン出身のアデラさんも本当に驚いたそうです。

### 熊本地震で困ったこと

3人のパネリストからは「何処に行けば良いのか分からなかった」、「避難所が何処になるのか?」、「（地震が怖いので）自分の国に帰りたい」、「熊本

《特集》熊本地震を振り返る 「誰ひとり取り残さない社会・外国人住民と考える防災」 ・・・ P1～3	目次
《未来の為に》熊本地震から5年に寄せて・・・ P4	
《事業報告》外国人の防災訓練・第16期英語でガイド養成講座 ・・・ P5	

### Contents

新たな事業展開「オンライン出前講座」 ・・・ P6	目次
インターン活動を振り返って 熊本学園大学 山川百香さん ・・・ P7	
ちょっと日本語/きふプロ/ 令和3年度賛助会員募集 ・・・ P8	

を離れたい」という意見や、避難所に行った人でも、「言葉が通じないので寂しかった」、「避難所で水とビスケットをもらったけど、原料が分からないので食べることが難しかった」という意見もありました。最大の問題として、日本語での情報入手の難しさが挙げられました。特に留学生は英語だけしか分からない人が多かったようで、日常会話レベルの日本語が出来る人もいましたが、そんな人にとっても、「避難所」「余震」「給水」など災害時特有の日本語は理解することが難しく、さらに被災時という非日常の状況下ではこれらの日本語を理解することはとても大きなストレスとなったそうです。また、情報量の少なさと正確な情報とデマを見分けることが難しいという問題もありました。実際に熊本地震では「動物園からライオンが逃げた」というデマが大きな問題になりましたが、その他にも「今後は日奈久方面で大きな地震が発生する」といった情報により人吉の方へ避難した人がいたり、4月16日の本震直後の午前2時頃に「再びマグニチュード7規模の地震が起きる」との情報が留学生のLINEグループで拡散されたそうです。2度の大きな地震体験によりパニック状態の時にこのような情報が伝わったため、冷静な判断がつかずに「とても怖い思いをした」との報告もありました。さらに、「津波で熊本大学近くの橋が流された」との情報が流れた時は、実際に橋の近くで交通規制をしている警察官の姿を見かけて、その情報を信じてしまったこともあったそうです。実際にはその橋は通行止めにはなっていましたが、流されてはいませんでした。これらは正確な情報の少なさから生じた不安が原因ではないでしょうか。信頼できる情報が十分に伝わっていたら不安の解消につながったかもしれません。

### 熊本地震時の支援活動について

そんな状況下でも、今回の3人は他の外国人被災者、または日本人被災者に対して支援活動を行いました。アデラさんは日本語が分からないフィリピン人の為に、LINEとfacebookで日本語の情報をタガログ語に翻訳して流しました。これらの災害情報は熊本市内だけでなく、直接的な地震の被害を受けなかった八代、天草、芦北、人吉のフィリピン人に対しても届けられ、今後に備えるようにとの注意喚起にもなりました。また、避難所となった国際交流会館の炊き出しにも協力をしてくれたり、大阪からフィリピン領事が熊本に来て相談会を行った時にも現地でのいろいろなお手伝いをされました。

熊本イスラミックセンターのマーロさんはインドネシア大使館や日本各地のイスラム協会から届けられた大量の支援物資を、宗教上の都合により避難所で出された食事に手を付けられずに食べ物に困っている同胞に配布しました。さらにそれらの物資を近所の住民にも配布したいと思いましたが、最初は誰も受け取ってくれませんでした。数日間はそのままだったので、日本語で「ご自由にお持ちください。」と張り紙をしたところ、少しずつですが、もらって

行ってくれるようになったそうです。翌日には、近くの避難所を訪問し、支援物資を配りに行きましたが、ここでも、「熊本イスラミックセンター」からですと言うと、断られ続けました。とても残念なことでしたが、その時に普段から協力関係にあった警察の方の紹介もあって受け入れてくれるようになりました。イスラム教に対する偏見と警戒心があったからではないか？と思ったそうです。

アンドリューさんは4月16日の本震後に一時的に宮崎に避難されたのですが、熊本に残っていた留学生達は避難所となった熊本大学の体育館でいろいろな活動をしました。特に熊本大学留学生グループの中で日本語が得意な学生は日本語の災害情報を英語に翻訳してLINEグループでシェアしたり、留学生が率先してヘルプデスクを設けたりしました。ここでも帰国する方法や他県に移動する方法等の情報をシェアしました。ヘルプデスクの運営ではいろいろな国からの留学生が協力したそうです。

### 支援する側になるために必要なこと

3人がそれぞれに行った支援活動について話を伺いましたが、そこで必要とされる条件について尋ねたところ「最低限の日本語が分かること」が前提に挙げられました。

アデラさんは「災害に関する最低限の知識」が必要だと話されました。フィリピン人会では熊本地震の1ヵ月前に地震に関するセミナーを開催し、300年前に熊本で起きた大きな地震についての話を聞いていたそうです。帰宅後、そのことを家族に話をしたけど、「熊本では大きな地震が起きることはありえない」と言われてしまったそうです。しかし、実際に4月には熊本地震が起きたのです。日本ではいつ、どこで地震が起きてもおかしくはありません。常に正確な情報の収集が必要です。

マーロさんは「ネットワーク（繋がり）」が必要だと話されました。他の民間団体同士、警察や公的な機関との繋がりによって活動がスムーズになりました。特にイスラム教といった宗教関係だと変な先入観を持たれてしまうことがあるので、国際交流会館や警察からの紹介があると受け入れに対するハードルが低くなるようでした。また情報の入手も大事です。地震の時の情報はほとんどが日本語だったので、国際交流会館から多言語で配信された情報はとても有効だったそうです。もちろん、外国人住民が日本語を勉強することの必要性も感じたそうですが、さらに、地域住民とのつながりを作る大切さを感じました。特に子どもの存在は大きく、子どもがスポーツの活動を通して大会に参加するようになると地域の中で情報が入ってくるようになり、回覧板を回すことで近所の人と顔を合わせて話しをするきっかけにもなったそうです。時には熊本市の掲示板を見て、気になる情報があっても日本語の意味が

分からないので、知り合いの日本人に尋ねて翻訳して情報を教えてもらうこともあったそうです。

当時留学生だったアンドリューさんは英会話学校の講師をしていたり、日本語教室で日本語を習っていたりしていたので数人の日本人との繋がりがありました。災害時にはこの繋がりが大切だと気づかされたそうです。留学生には数年間という長期の留学をする人や半年間、1年間という短期の留学生もいます。さらに研究生で勉強がとて忙しい留学生は、日本人との繋がりを作るチャンスは少ないと懸念されていました。そもそも、短期で滞在する留学生は防災に対する関心も低いそうです。アンドリューさんが熊本地震の翌年に来た留学生に被災体験を話したところ、彼らは「前年に、熊本で大きな地震が起きたので、これからしばらくは地震は無いだろう」と考えていて、また、留学生のほとんどは若者なので危機感が薄いことを心配



されていました。留学生はオリエンテーションの時に防災に関するチラシをもらうのですが、ほとんどの学生は興味が無いのでその時に読むことはなく、数日後にはゴミ箱に入っています。同じ様に防災訓練に対して参加の呼びかけをしても、やっぱり危機感が薄いので参加する学生を見つけるのはなかなか難しいとのことでした。宗教や国としてのコミュニティのようにもっと強い、地域での繋がりや、日本人との繋がりが必要なのかもしれない。

### 繋がりを作る壁となること

外国人住民が日本人との繋がりが持てない理由は言葉と文化の違いだと思われます。外国人が日本人の質問に対して答えを間違った際に、そのことを笑われると、その後会話を続けることは難しくなるそうです。日本語を勉強してきた外国人にとって日本語は難しい言葉ですし、さらに熊本弁は本当に難しいとのこと。熊本弁は早口で、時には怒っているような口調に聞こえて怖い時もあるようです。やさしい日本語で話しかけてくれれば、お互いにフレンドリーな対応ができて、もっともっと仲良くなれると思われます。介護の仕事をしているフィリピン人の中には、職場のスタッフの強い話し方によって、精神的に傷ついてしまい、仕事を続けることができない人もいます。

言葉と同様に文化の違いを理解することも大切です。先ずは外国人には日本語の理解を、日本人には相手の国の文化を理解することが必要です。

### 今後の防災に必要なことは

災害時は大きなストレスにさらされているので、いつもは日本語でコミュニケーションができる人も、敬語や専門的な言葉、方言は理解することが難しくなります。やさしい日本語ではっきり最後まで短く話しかけることが大切です。気を使って丁寧な言い方をした時に敬語をつかうことが多いのですが、逆に、外国人にとっては理解を難しくすることがあります。この時は「やさしい日本語」を使うだけでなく、「優しい言い方」を心がける必要があります。避難所で子供が騒いでいた時に厳しい口調で注意された人もいて、精神的にショックを受けていた外国人避難者もいたそうです。地域の避難所に入ってもほとんどが日本人でそこで外国人避難者が一人だと、自分から周りの人に声をかけるのは気が引けるそうです。一人で避難している外国人を見かけたら、日本人の方から声をかけてほしい、声をかけてもらえるとても安心するとの意見がありました。被災した時にはとても心細くて特に自国を離れて避難している時に電話もインターネットも使えないとても寂しいので日本人から声をかけてくれると安心できます。そして、避難所運営の手伝いなど、共に活動することでストレスが和らぐそうです。



やさしい日本語ではっきり最後まで短く話しかけることが大切です。気を使って丁寧な言い方をした時に敬語をつかうことが多いのですが、逆に、外国人にとっては理解を難しくすることがあります。この時は「やさしい日本語」を使うだけでなく、「優しい言い方」を心がける必要があります。避難所で子供が騒いでいた時に厳しい口調で注意された人もいて、精神的にショックを受けていた外国人避難者もいたそうです。地域の避難所に入ってもほとんどが日本人でそこで外国人避難者が一人だと、自分から周りの人に声をかけるのは気が引けるそうです。一人で避難している外国人を見かけたら、日本人の方から声をかけてほしい、声をかけてもらえるとても安心するとの意見がありました。被災した時にはとても心細くて特に自国を離れて避難している時に電話もインターネットも使えないとても寂しいので日本人から声をかけてくれると安心できます。そして、避難所運営の手伝いなど、共に活動することでストレスが和らぐそうです。

との意見がありました。被災した時にはとても心細くて特に自国を離れて避難している時に電話もインターネットも使えないとても寂しいので日本人から声をかけてくれると安心できます。そして、避難所運営の手伝いなど、共に活動することでストレスが和らぐそうです。

### 最後に

今回の防災のキーワードとして「繋がり」が挙げられます。熊本地震後も在住外国人の人口は増加しています。彼らは「災害時要配慮者」とされていますが、留学生や実習生等若い人の割合が高く、高齢者や子どもを支援できるとも心強い存在となりえます。そうなるためにも、普段の生活の中で互いに繋がりを作っておくことが大切です。事業団では外国人住民の方へ、様々な形で日本語教育を行っています。また、避難所で避難してきた外国人のお手伝いをする「災害時外国人支援多言語サポーター制度」も設けています。さらには外国人住民を対象にした「外国人の防災訓練」も実施しています。このように外国人住民の方々と一緒に活動することで「災害に強いまちづくり」へとつながっていくと考えています。

# 未来のために

私たちの未来を考える上でとても重要な視点である共に生きる社会、多文化共生について当事業団の多文化共生アドバイザーである羽賀友信さんに熊本地震から5年を振り返るとともに今後の事業団の目標について、ご寄稿いただきました。



筆者：羽賀 友信さん

- ・長岡市国際交流センター「地球広場」センター長
- ・まちなかキャンパス長岡 学長
- ・協働ネットワーク長岡 顧問

今年で震災から5年になります。ようやく熊本城の天守閣も修復され、復興の明るいニュースになっています。この震災により失われたものも多々ありますが、それによって確立された新しい考え方もたくさんできました。

## 1. 外国人が支援「する」側に

今まで、外国人は支援を「される」対象として常に考えられてきました。しかし、熊本地震発生時にはフィリピンの人たちが中心となって国際交流会館に避難した人々を支援してくれました。具体的には、建物の中では火が使えないため、建物の外で調理をし、食事を提供してくれました。この食事はこれまでの日本人が提供する食事とはかなり趣が違って、元気の出るものでした。ここには、「つらい時だからこそおいしいものを食べて元気になろう」という考え方が込められています。

また、熊本イスラミックセンターの皆さんも支援をしたということで、協力してくれました。東日本大震災でも、一番最初の炊き出しをしたのはイスラム教徒の方たちでした。これは、金曜礼拝でみんなが集まった後、大量に調理し食事を提供することに慣れている皆さんだからこそ出来たことだと思います。独自のネットワークを利用して、多くのイスラム教徒から支援物資も届けられました。

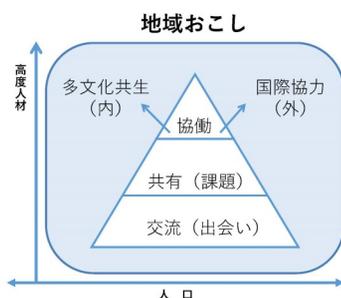
さらに日本人ボランティアは、多文化共生マネージャーの人たちが近いエリアから順番に応援に入ってくれ、情報の翻訳・発信を手伝ってくれました。元原稿になる情報は市の災害対策本部から提供してもらい、信頼のおける情報をベースにやさしい日本語と多言語化した情報を発信しました。

これらがスムーズに行われた背景には、「日常の活動が非常時に役に立つ」ということに尽きると思います。日ごろから多様な能力を持った集団が国際交流振興事業団を通して出会い、連携することに慣れていたため、被災時には支援「される」側から「する」側へと回ったのです。

## 2. 交流・多文化共生・国際協力

事業団が日ごろから力を入れてきたことの一つに、国際交流と多文化共生、国際協力の関係性を意味づけるということがありました。「交流」は、人材育成ピラミッドの底辺を成す役割で、楽しさを通して出会いと啓発を行うことです。ここで共有された課題に対し、地域での生活支援は

「多文化共生」と呼ばれ、SDGsや途上国支援など国境を超えるグローバルな活動は「国際協力」と呼ばれます。底辺の人口が多く参加しなければ、課題解決をする多文化共生と



国際協力の人口は増えません。これらの活動を通して、高度な専門性を持った市民が育成されるのがこのピラミッドの意味です。

平和のような大きな話題は理解しにくいですが、身近なものに置き換えることで理解が促進されます。労働に対するフェアな対価を払い労働環境を整備することで生まれた「フェアトレード」が会館の1階で展開されているのもその一つです。全国を俯瞰すると交流のみ、多文化共生のみ、国際協力のみというところも多く見受けられますが、この3つがうまく連携することにより、グローバル社会に対応した地域づくりが可能になると思います。

## 3. グローカルな時代

2016年からSDGsの普及が進められ、地球規模の課題に対して自分・地域がどう取り組むかという当事者としての視点が求められるようになってきました。グローバルな解決法ではありませんが、ローカルな個人や地域の活動の集大成が結果としてグローバル活動につながります。特に、ソーシャル・ネイティブと呼ばれる若者たちはSNSを駆使し、コロナ禍を乗り越えて連携しながらコミュニケーションを図ります。ここでコミュニケーションの方法はグローバルなシステムですが、熊本のローカルな情報をこのシステムで共有することが求められ、それに対応できる人材が必要とされています。グローバル視点とローカル視点をどう結びつけるかという「グローカル」な時代に入りました。

## 4. プラットフォーム

事業団の今後の戦略として、プラットフォームを管理するということがあります。課題が出た際に、プラットフォーム上に多様な専門性を持った人材をネットワークからピックアップし、タスクフォースを編成し、問題解決に当たることが必要とされます。

このプラットフォームは、言語教育のプラットフォームや災害のプラットフォームなど、必要に応じていくつも設定され、その都度タスクフォースの編成を変えながら課題解決を行うことが重要になります。この管理者としての事業団の役割は非常に重要で、ここに「人材育成の3世代化」という考えを入れる必要があります。中心となって活動する世代、経験値が高くアドバイスをする世代、そして、学び・経験を積む学習世代となります。この3世代がつながることで、人材が常に育成され、循環するようになります。

今後、特に重要になってくるのが、全市的なグローバル化プロジェクトを横断的に結び、市民・大学・行政・企業が連携してこれを実行できる地域にすることです。これが国際交流振興事業団の大きな長期目標になるのだと思っています。

## 外国人の防災訓練

7月から10月の台風シーズンに備え、7月22日に「外国人の防災訓練」を実施しました。当初は6月に予定していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、7月に延期となりました。今回の訓練では、前回の訓練時に実施したアンケートから「避難所」を体験してもらいたいという目的がありましたので、対面形式での開催にこだわりました。



熊本では毎年のように影響を受ける「台風」についてその仕組みや被害を知り、避難行動について学び避難所模擬体験をしました。

熊本市危機管理防災総室の職員の方に台風の発生の仕組みや実際に熊本で起きた台風被害の様子を話してもらいました。「マイタイムライン」のワークシートを使って個々の安全行動計画を

作成しました。台風が発生し、近づいてきたらどの時点でどんな行動をとるのか、また、災害情報をどこから収集するのかなどを聞き、それらを基に自分の行動計画を作成しました。

そして避難先としての避難所がどこにあるのか、そこではどんな行動をとるのかを実際に経験してもらいました。

外国人住民にとって、非常時に過ごす避難所での生活ははとでもストレスが多いようです。避難所でのルールを理解してもらうことも重要ですが、私たち日本人避難者が、外国人避難者に配慮し、寄り添うことで、不安を抱える外国人避難者に大きな安心を与えることができると思います。



## 第16期英語でガイド養成講座

コロナ禍でほとんどの講座が延期・中止される中、今年で16期目となる「英語でガイド養成講座」をオンラインにて開講しました。この講座は昨年までは「英語でボランティアガイド養成講座」として15年にわたって続けてきましたが、16年目を迎えるにあたり、「ボランティア」の表記を取って「英語でガイド…」となりました。これには当講座の立ち上げからコーディネーターを務めている野田恭子氏の「ボランティア=無償・無料というイメージがあるので、受講生の皆さんにプロとしての自覚を持ってもらいたいから」という強い思いからです。



今年のテーマは熊本の最大の観光地の一つ、「阿蘇」です。2014年にも同テーマで講座を行いました。熊本地震で壊れた、国道57号線や阿蘇大橋等の復旧が進む阿蘇の魅力を再発見しようと計画しました。コロナ後の海外からの観光客の誘致を見据えて、特別講師を迎え阿蘇の観光地の魅力や歴史、阿蘇に由来のある神社やお寺などについて学びました。阿蘇は古来から人々の生活の中で信仰の対象となっており、様々な言い伝えや神話が語り継がれてきました。講義の後半は、英語による紹介の仕方を学びました。

今年は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で全

7回中、6回の講座がオンライン（ZOOM）での開催となりました。オンラインについては昨年度から準備はしてきましたが、実際にオンラインでの開催は初めてとなりました。開始当初は、いくつかトラブルもありましたが、後半はスムーズに進行でき、受講生の皆さんも慣れてきたのか、講師の方への質問や発言の機会も増えてきました。

最終日は受講生の方に、実際にガイドツアーを体験してもらうため対面での実施となり、熊本城を訪問しました。国際交流会館を出発し、城彩苑から特別見学通路を通して城内へと進んでいきました。完成したばかりの天守閣に登り、最上階から城内を見渡すと、まだまだ崩れたままの石垣があちこちに見られ、作業が途中ということが分かります。しかし、少しずつですが復旧工事が進んでいるところが見られて勇気をもらったような気になりました。



熊本地震、そして新型コロナウイルス感染症を乗り越えて、再び外国人観光客の方々が来熊されることを期待し、また、その時に万全のおもてなしができるよう熊本について学べる講座を続けていきたいと思います。

## 地域国際化推進事業（出前講座）のオンラインでの実施について

私達、熊本市国際交流振興事業団では、学校や公民館、市民の皆さんの集まりに対して熊本で生活する外国人を講師として派遣する「地域国際化推進事業（通称：出前講座）」を実施しています。これまでに30カ国以上約200人の方がボランティアとして登録、活動されており、年間約50件、週に1回程度の割合で派遣を実施してきました。

派遣の内容は自国の生活やお祭り、観光地、食べ物等についての紹介、民族音楽や舞踊、遊びなどを一緒に体験したり、また、家庭料理を一緒に作って食べる料理教室などを行ってきました。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、料理教室はもとより、対面での講座も、そのほとんどが延期、中止となり、昨年度の当事業の派遣件数は2件しか行われませんでした。

そんな中、過去に4～5人の外国人講師を派遣し、自国の紹介と、その国の遊びを体験するプログラムを開催した熊本市内の小学校からオンラインで複数の国の紹介を聞けないかという相談がありました。

コロナ禍の中でも実施可能な異文化理解・異文化交流の方法ということでオンラインでの実施を検討しました。4人の講師と小学3年生3クラスとをオンラインでつなぎ、それぞれの国を紹介していくことでした。依頼の内容は、世界の各地域からということでヨーロッパ（ブルガリア）、アジア（韓国）、北米（カナダ）の講師を手配し、南米の国の代わりに南半球のオーストラリア人講師を探しました。

上記4か国の講師と連絡がとれましたが、その中でブルガリア出身のイリナさんは、現在はブルガリアに帰国中で、日本に戻ってくる日は未定とのことでした。



講師をしてくれるのは難しいかとおもいましたが、ぜひ、引き受けたいとの申し出がありました。確かにオンラインで繋がることができれば、パソコンさえあればどこにいても

問題はありません。これまでも、何度も出前講座で自国の紹介を行っているので自国を紹介する経験があります。後は時差が問題でした。打ち合わせの時間（日本時間の夕方）は現地の昼間でしたので問題はありませんでしたが、実際に紹介を行ってもらう時間帯（日本時間の午前9時半～11時30分）は現地（ブルガリア）の午前2時30分～4時30分となってしまいます。そこで、発表の順番を最初にしてもらい、起きていてもらうことにしました。実際にオンラインで繋がると、画面上は国内外の差はほとんど感じられませんでした。しかし、講師からの説明や講師の様子（眠そうな感じ）から、日本とは違う時間帯ということを感じ

てくれたと思います。講師の方も本当に眠い時間帯ではあったと思いますが、頑張って紹介してくれました。

また、オーストラリアの講師は、当初予定していた方が急遽、仕事の都合でキャンセルしたいとの申し出がありましたので、以前、熊本で生活されていて、今はオーストラリアに帰国されたトゥン・ミンさんをお願いをしました。彼も日本（熊本）にいた時に何度か自国の紹介で学校や公民館を一緒に訪問したので内容はすぐに理解してもらえました。現地とは数時間の時差なのでオンラインで繋がれば大きな問題ではありません。当日の紹介もスライドを使って行ってくれて、南半球からということで、季節が逆であることや、新型コロナウイルス感染拡大防止の為、厳しい取り組みをしている町の様子を伝えてくれました。

このように、新型コロナの影響で事業の形式が変わり、これまでとは違った対応を迫られるようになりました。しかし、一方でこれにより新たな事業への参加方法や運営の方法が加わることにより、熊本を離れた外国人の方にも、再び活動してもらえる機会を設けることができました。世界をオンラインで繋ぎ、世界の「今」の状況をお伝えすることができるようなプログラム作りを進めていきたいと思っています。



野島イリナさん  
(ブルガリア)

皆さん、こんにちは！2月に小学校のイベントに参加をさせていただきました。ブルガリアと日本の時差は7時間あります。本番の時に、こちらは朝の2時だったから、眠くて少し大変でしたけど、とても楽しかったです。またよろしくお願いします！ДОВИЖДАHE



リ・トゥン・ミンさん  
(オーストラリア)



オンライン（ZOOM）を使った自国の紹介はこれまでとは違ったものになったが、簡単に繋がれてとても楽しく交流ができた。子どもたちが国の紹介を楽しみ、興味を持って聞いているのを見られて良かった。参加できたことを感謝します。

7月に国際交流会館での3ヵ月間にわたるインターンシップ活動を終えて、たくさんのことを学び、吸収することができたと思いました。

4月後半から始まったインターン活動、開始当初は何も分からず、国際交流会館や管理運営を行っている一般財団法人熊本市国際交流振興事業団の活動について知るところから始まり、少しずつですが事業団の活動が外国人とどう関わっているのか分かっていきました。

5月は国際交流会館の1階にあるカフェ「linkcafé」の業務を体験しました。linkcaféの商品は全てフェアトレードのもので、調べてみるとそれぞれの商品に意味と背景がしっかりあり、それらを知った上で商品を扱うと以前とは気持ちが全然違ってくるものだと強く感じました。

5月の前半、カフェは「まん延防止等重点措置」により店内での飲食物の提供ができなくなり、テイクアウトによる販売だけとなってしまいました。でも、その期間を利用して、商品を調べて、その商品を紹介するポップ作りを行いました。また、カフェでは新しい試みとして市役所や県庁などへお弁当のデリバリーを始めました。このお弁当のデリバリーは各部署からまとまった数の注文が入るので、準備をするのに時間がかかり、お昼前の配達に間に合わせるためには短時間で効率的な作業が求められました。何よりスタッフ全員が初めてのことであるので試行錯誤しながら作業に取り組めたので、その過程に携われたことはとてもいい経験になったのではないかなと思いました。

また、総務の仕事である伝票作成や整理、入出金の確認などの作業を手伝う機会もありました。簿記の授業の中で目にしたことがある用語を見かけて、簿記が実際に使われていることが分かって嬉しかったです。会社としてどのようにお金が動いていてどのように管理されているのかも分かり、このようなことはあまり目立つことではないけど、責任重大だし、会社を支える大事な業務だと感じました。

4月の活動当初から事業のチラシ作りを頼まれて、6月までにたくさんのチラシを作ってきました。最初はそのイベントがどのようなものかも全く知らないままだったので、どのようなチラシを作ったらいいかイメージも出来ませんでした。そのため、メリハリがなく、伝えたいことがうまく伝わるようにできていなかったり、1番伝えたい内容が分かりにくくなっていました。しかし、イベントに参加して、どのような内容でどのような参加者がいるのかを知ることで、目的や伝えたい内容がはっきりしてくるとチラシを作るのが楽しくなっていました。

他の人が作った見やすいチラシを調べて、日時や参加費などの項目の文字を大きくしてみようとか、はっきりした色を使って手に取ってもらえるように目立たせようなど、デザインも同じパターンになってしまわないように工夫することができるようになってきました。この作業を始めてから日常生活でもチラシに目が行くようになり、参考にしようと思うようになりました。

講座で使う資料や個人情報の入力、封筒やラベルの作成など、パソコンを使う作業が多くあり、私は今まであまりパソコンが得意ではなかったけれども、このインターンシップを通して得意になっていったように感じます。

私が将来就きたい業種とは違う業務内容ではあったけど、一つにしか向いていなかった視野が広がったように感じます。自分は何が得意で何が苦手か、どのような作業が好きかわかってきたので、他にも自分に合っている仕事があるかもしれないと思うようになりました。

本当は2人で来るはずのインターンシップだったのですが、1人での活動となってしまい最初はとても心細かったです。でも、今では1人だったことが私にとってはとても成長できる環境であったと思います。事務所の中で作業ができたので職場の雰囲気を感じることもでき、1人である分、多くの作業を任せてもらえてたくさんの職員の方と接することができました。

私はとても人見知りで最初は馴染めるかとても不安だったけど、優しい人ばかりで、皆さんたくさん声をかけてくれたので楽しくインターンシップ生活を送ることができました。

インターンシップを通してメモを取る習慣、作業の効率や自分なりの考えをもって取り組む姿勢が身に付きつきました。3ヵ月という長い期間があつという間に過ぎてしまいましたが、一人の社員になった気分で活動することができてとてもためになり、成長できたように感じます。

このインターンシップでの経験を今後の就職活動でも生かしていこうと思います。



「英語でガイド養成講座」では修了書のプレゼンターとして活躍



期間中に作成したチラシの一部

ちょっと Japanese Tip  
日本語

NPO法人日本語サポートあさ

代表 小川 ひろみ さん

世界の日本語へ

世界の国々では学校の新学期が夏や秋からのことが多く、日本語学校も例年なら秋の新学期にむけて夏休みから学生がやってきているところです。そしてベトナム、韓国、中国の学生たちは到着次第、カタカナや漢字でなく横書きで表記された名簿どおり、名前を姓（家族の名前）→名（自分の名前）の順で名乗って自己紹介します。ここでちょっと、日本人のローマ字表記の名前はとうでしょうか。

TOKYO2020オリンピックでは日本人選手や関係者の名前はこれまでとは違って姓→名になっていました。2000年に国語審議会では日本人の名前は「姓一名」の順にすることが決まりましたが定着せず、2020年1月から国はオリンピックを期に公文書のローマ字表記を「姓一名」の順に普及したい考えです。他にも選手団の出場順が「あいうえお」順で日本式の呼び名になり、イギリスは英国でウルグアイの後になりました。また、GERMANYはドイツ、CHINESE TAIPEIは台湾（たいわん）とアナウンスされました。

TOKYO2020のキーワードは多様性、日本式が採用され、日本語が方言を含め多様性のある世界の言語へと日本語の明るい未来を感じました。

きまブロ インターンシップ生、サポートセンターボランティアの皆さんが綴るKIFのアクティビティ インターネットではもっとたくさん紹介しています。  
<http://blog.goo.ne.jp/kifblo>

こんにちは。インターンの山川です

今日は「CIRカフェ」※に参加し、「世界の台所（伝統料理・道具・母の味）」というテーマで、それぞれの国の食について学ぶことができました。

アメリカはキッチンに大きい冷蔵庫があり、4ℓほどもある牛乳が2つ入っている写真を見てとても驚きました。また、お菓子で作られた小さいお家の話聞いて、沖縄出身の私は昔、姉が学校の行事で行った米軍基地のアメリカンスクールから持って帰ったお菓子の家を思い出しました。ウォルターさんも言っていたように食べきれませんでした。

ドイツは、パンの種類がとてもたくさんあって食べたくまりました。また、家のキッチンには大きなオープンが必ずあり、そこでパンを作るのではなく、ケーキを焼くそうです。ケーキの種類にはトルテとクーヘンがあり、クーヘンは特別な日だけではなく毎週焼くこともあり、母の味になるのかなと思いました。

韓国はたくさんの種類の料理ができてとてもおいしそうでした。とてもバランスの取れた食事が多いと、いくつかの料理を見て思いました。また、印象に残っていたことは、私たちが「こんにちは」と挨拶するように韓国人は「ご飯食べましたか？」と言うそうです。韓国ドラマを見ていても食べるシーンが多いように感じるし、この言葉からも、韓国人は食べることがとても好きということが伝わってきました。

私は「日本の料理を説明して」と言われてもうまくできません。今回のCIRカフェを通して、食について学ぶことで、いろんな国の文化に出会い、もっと食事を楽しむことができると思いました。

（山川百香さん 熊本学園大学 4月13日～7月7日 48日間のインターンシップ）

※CIRカフェ：CIR（熊本市国際交流員）のウォルターさん（米）、アンナさん（独）、ヨンスさん（韓）による異文化交流プログラム。

☆2021（令和3）年度賛助会員募集中！☆

一般財団法人熊本市国際交流振興事業団では賛助会員を募集しています。当事業団の活動にご理解とご支援をいただくと共に、さらなる国際交流や国際協力の輪が広がることを願っています。

会員の方々には、事業団の機関誌『ニュースレターくまもと』の送付や様々な情報の提供をさせていただきます。

- ①個人会員 一口 2,000円/年(一口以上) ②団体会員 一口 10,000円/年(一口以上)



一般財団法人熊本市国際交流振興事業団

住所：熊本市中央区花畑町4番18号

熊本市国際交流会館

休館日：第2・第4月曜日、年末年始（12月29日～1月3日）

TEL：096-359-2121

FAX：096-359-5783

E-mail：pj-info@kumamoto-if.or.jp

URL：https://www.kumamoto-if.or.jp

